

なみふる

「なみふる(ナイフル)」は「地震」の古語です。「なみ」は「大地」、「ふる」は「震動する」の意味です。



- p.2 スリランカで見たインド洋大津波の被害
- p.4 平成版「稲むらの火」
- p.6 2004年スマトラ沖地震で発生した地球を周回する表面波
- p.7 **新連載** 地震“鯨”とつきあう秘訣
- p.8 こどもサマースクールの「卒業生」、震災10年の神戸に結集

インド洋大津波で破壊された煉瓦造りのスリランカの住宅。詳しくは、p.2の記事「スリランカで見たインド洋大津波の被害」をご覧ください。

2005年2月～2005年3月のおもな地震活動

2005年2月～3月に震度4以上が観測された地震は7回でした。図の範囲の中でマグニチュード(M)3.0以上の地震は、1,107回発生し、このうちM5.0以上の地震は20回でした。

父島近海

伊豆・小笠原海溝の東側で発生した地震であり、この地震により東京都小笠原村の父島の2地点で震度1を観測しました。この地震は地震の余震であり、震度1以上を観測した地点はありませんでした。

茨城県南部

フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震であり、茨城県の土浦市、つくば市、玉里村で震度5弱を観測したほか、東北地方南部から東海地方にかけて震度4～1を観測しました。この地震により、負傷者26名、ブロック塀の倒壊1件の被害が発生しました(1月16日現在、総務省消防庁による)。

台湾付近

日本国内で震度1以上を観測した地点はありませんでした。

青森県東方沖

太平洋プレート内で発生した地震であり、青森県の5地点と岩手県の2地点で震度4を観測したほか、北海道から東北地方にかけて震度3～1を観測しました。

台湾付近

この地震により、沖縄県の与那国島で震度2、石垣島と黒島で震度1を観測しました。この地震により台湾で負傷者2名以上の被害が発生しました(USGSによる)。この地震は地震の余震であり、沖縄県の与那国島で震度2、黒島で震度1を観測しました。

釧路支庁中南部

太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震であり、北海道厚岸町で震度4を観測したほか、北海道から青森県にかけて震度3～1を観測しました。この地震は、2004年11月29日に発生した釧路沖の地震(M7.1、最大震度5強)の余震域の西側で発生しました。

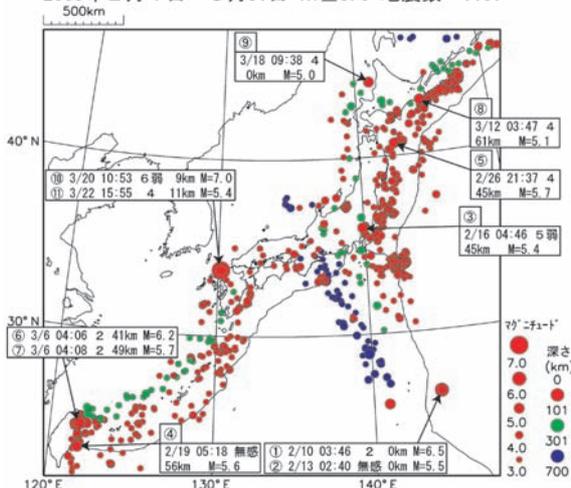
北海道北西沖

北海道の羽幌町で震度4を観測したほか、北海道の北西部で震度2～1を観測しました。

福岡県西方沖

福岡県福岡市の東区、中央区、前原市、佐賀県みやき町で震度6弱を観測したほか、北九州を中心に関東地方の一部から九州地方南部にかけて震度5強～1を観測しました。この地震により福岡県を中心に佐賀県、長崎県、山口県、大分県で被害を生じました(死者1名、負傷者1,015名、住家全壊454棟、住家半壊1,033棟など、4月13日現在、総務省消防庁による)。気象庁は地震発生4分後の10時57分に福岡県日本海沿岸と香岐・対馬に、「津波注意」の津波注意報を発表しました。その後、津波が観測されなかったことから、12時00分に津波注意報を解除しました。余震活動は本震余震型で推移しており、この地震(最大震度4、負傷者1名)が発生しましたが、余震回数は順調に減少しています。本震及び余震は北西-南東方向に約30kmの範囲内に分布しています。この震源分布と決定された発震機構から、北西-南東方向の断層がほぼ水平方向にずれた(左横ずれ断層)と推測されています。

2005年2月1日～3月31日 M \geq 3.0 地震数=1107



世界の地震

M7.0以上あるいは死者50人以上の被害を伴った地震は以下のとおりです。(発生日は日本時間、Mや被害は米国地質調査所[USGS]によるものです)。

- ・2月5日21時23分
フィリピン、ミンダナオ島(Mw7.1) 深さ564km、死者2名
- ・2月22日11時25分
イラン中部(Ms6.5) 死者612名以上、負傷者1,411名以上、住家被害約8,000棟等
- ・3月2日19時42分
インドネシア、バンダ海(mb7.0) 深さ202km、被害なし
- ・3月29日01時09分
インドネシア、スマトラ島北部(Ms8.4) インドネシアのニアス島を中心に1,300名以上の死者、シムルー島で3mの津波、ニアス島で遡上高2mの津波、インド洋周辺国で50cm未満の津波を観測。

(気象庁、文責:上野 寛)

図の見方は「なみふる」No.31 p.7をご覧ください。

スリランカで見たインド洋大津波の被害

はじめに

スマトラ島沖地震津波による被害はインド洋全域にひろがり、現時点で死者が30万人を超える史上最大の災害となりました。マグニチュード9.0の地震によって引き起こされたこの災害は、インドネシアの地震被害、インド洋全域にわたる津波被害、数百万人に及ぶ被災者への国際救援活動、インド洋沿岸諸国での復興など、長期にわたって総合的に検討すべき多くの課題を抱えています。私たちは、突発災害調査という限られた時間・マンパワーの制約の中で、現地で行った災害の像を明確化するための現地調査を行いました。津波災害の研究・検討にあたっては、単に津波外力の推定だけでなく、地域の防災体制、防災対応などとの比較が重要であり、今後どのように教訓を生かしながら、復旧・復興に支援するかが肝心です。本文では、スリランカ（調査地点は図1を参照）で見た被害の実態を紹介します。

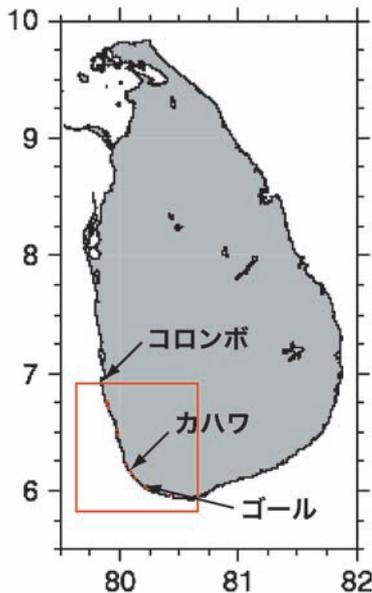


図1 スリランカ島と調査実施地域。赤枠は図2の範囲。

調査方法と内容

調査チームの編成には、津波現象・災害の関連テーマに関心のある人、調査の経験のある人などから選考する必要があります。この中には、海洋学者、工学者、測量士、地震学者、地質学者、社会学者、地域計画者などが挙げられます。構成員の中には、必ず被災国から、また、被災国の国語を理解できるメンバーを入れる必要があります。特に、調査許可を得るためにも、被災国の気象庁、大学、国公立研究所、政府に關係す

る人が不可欠です。

これらの構成は、被災後、出来るだけ早く行わなければなりません。ただし、被災地での混乱やアクセスなども考慮する必要があり、過去の例を見ると、ほぼ被災後2週間程度で現地に入っています。ただし、今回は被害の甚大性および緊急性を考慮して、いち早く現地調査を実施しました。

一般的な地震津波調査の項目を以下にまとめます。今回は緊急現地調査でしたので、津波の痕跡調査や簡単な住民へのヒアリングに留まっています。

・津波関連

到達時間、来襲方向、第一波の挙動(上げ、下げ)、最大波、津波の痕跡高さ・沿岸からの距離、周辺地形の特徴、津波のタイプ(壁のように、ゆっくりと流れるように、普通の波のように)、来襲時の音・風・特異な現象、津波による人的・物的・経済的被害の全体像、海水の濁り、土砂移動

・建物・施設被害

家屋、沿岸施設、道路・鉄道、インフラ、港湾・漁港施設、建築・土木構造物

・情報及び避難について

開始時間、避難場所、避難経路、避難のきっかけ、避難行動、災害情報の有無とその内容、津波・地震に関する言い伝え

主な調査結果

津波来襲状況：津波の浸水高等^{だか}について調査した結果を図2に示します。今回の津波では、浸水域が広大であったため、遡上点^{そじょう}まで把握することが難しく、ほとんどの測定値は浸水高^{注2}です。今回のコロンボからゴールまでの平均浸水高さは、5m程度でした。9-10mにも達した地点もありました。建物や地形の影響を受けて、局所的な津波の増幅も見られました。この沿岸での地形は平坦であり、2-3mの標高を持つ地域がほとんどです。そのために、遡上してくる津波が斜面を駆け上がって大きくなる様子は見られませんでした。沖合からほぼ5m程度の津波が来襲し、海面が上昇し、陸域へ流れ込み、そのまま内陸へ流入していったものと思われます。カハワのような地形は、海岸域で標高が高く、内陸に行くにつれて若干低下する傾斜があります。このような場合では、内陸へ浸水してから勾配を下がるにつれて、流れが加速されます。

[注1] 津波が最も高くまで陸地を這い上がった地点。

[注2] 津波到達地点の地表面からの高さ。

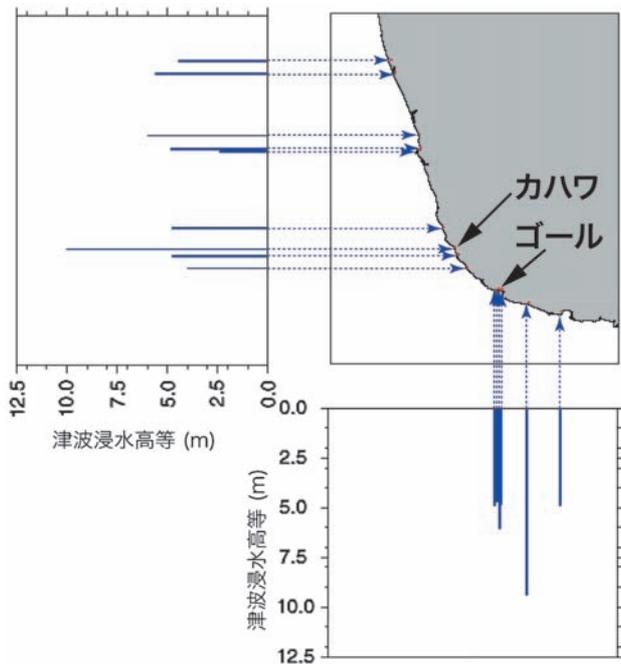


図2 合同調査団による津波浸水高等

これが、内陸奥深くとも大きな流れによる被害が生じた原因のひとつです。

建物破壊：押し寄せる水の力は水深に比例し、流速の2乗に比例します。さらに、物体の形や大きさも関係します。ココナツの木などは形状が一見倒れそうに見えますが、細い円柱であるため前後で流れを大きく変化することがありません。その結果、周辺の建物は破壊されても植生だけが残っているという光景が各地で見られました。同じ理由で、1階が柱で構成されているピロティー方式の建物(高床式住居も含む)は、津波被害を免れることが多いわけです。この地域に多い煉瓦造りの家は、強度的には鉄筋コンクリートに劣ります。水圧を受けただけでも倒壊しており、さらに流れが加わって煉瓦の壁などは粉々に破壊されました(表紙写真参照)。

列車事故：今回、ゴール市北部のヒッカドア、カハワでは9両の列車が被災し、千名以上の犠牲を出しました。津波第一波が来襲した時に、この列車がたまたまこの付近を通過しており、停止しました。第一波は、陸上で僅かに浸水した程度で被害を出すことはありませんでした。この周辺の住民も津波来襲の異変を見て、内陸側へ避難を開始しています。その一部は、停車していた列車の内部へ逃げ込んでいました。列車の車両は、車などと比較して強固であり、高さもあるために、住民にとっては安全に見えたに違いありません。しかし、30～40分後(証言によっては15分程度)に来襲した第二波に

より飲み込まれてしまいました(写真1)。第二波の痕跡は浸水高で5m前後、局部的に10mに達する場所もありました。車両は大きな破壊を受けることはありませんでしたが、内部に浸水した海水により、ほとんどの乗客・住民は外に逃げ出すことも出来ずに水死してしまいました。一瞬に来襲した津波による悲劇です。第一波で避難行動を開始しましたが、場所が悪く被災してしまいました。津波の場合、遠い場所よりも高い場所への避難が原則となります。

ゴール市での浸水：ゴール市は旧市街(世界遺産にも指定されている城壁で囲まれた街)と新市街に分かれます。この周辺でも津波の浸水高は5m程度であり、ほぼ同程度の高さで護られている旧市街と低い地盤で防潮堤などもない新市街では、大きく被害状況を異にしました。ゴール市では、大きな引き波(湾口付近まで海面が後退し、そこでの水深は10mと言われる)の後、6m程度の押し波が来襲、新市街に浸入したものと考えられます。半島のような旧市街の左右に分かれた津波は、その背後にあるバスターミナルにも来襲しました。西側から浸入した津波の方が到達時間は早く、これを追いかけるように右側から津波が入ったと思われます。全く違う方向からの津波来襲は、バスターミナルにいた多くの住民から証言を得ています。

港湾・漁港での被害：ベルワラ、ヒッカドアでの漁港被害、ゴールでの港湾被害を視察しました。前者の漁港には石積みの防波堤があり、漁港の護岸もしっかりしています。そのために、港内と港外では津波の浸水高に差が生じ、内部での被害軽減に寄与したと思われます。ただし、防波堤そのものが破損し、港内の漁船が流出して座礁していました。石積みの護岸は高さが十分ではなく、津波の内陸部への浸入低減の効果まではなかったと判断しています。津波の流れが強い場所では、石積みが破壊・移動し、大きな岩塊が何メー



写真1 スリランカ、カハワ地区での被災状況(列車も流された)

トルも動いていました。ゴール港でも津波浸水高は5m程度で、護岸での侵食、大型作業船の陸上への打ち上げ、港湾建物の1階部浸水が見られました。漁港も港湾も破壊的な被害を受けていませんが、機能は停止しており、復旧復興のみならず地域社会への影響は甚大です。

侵食：沿岸部、建物周り、橋脚や鉄塔周りで大規模な侵食または堆積が見られました。本体は大丈夫であっても、基礎部での侵食のために傾斜し機能低下が起こっていました。このような砂移動は、押し波だけでなく引き波でも生じ、衝撃的な力の作用より一方向の流れの継続時間が長いと、大きな規模の侵食が生じました。狭い河口に浸入した津波が広い河道内に広がり、大きな渦を形成し、それが線路の基礎を大きく侵食しました。深さ2m、長さ200m以上、幅20m位の規模でした（写真2）。なお、アスファルトやコンクリートで覆っていたところは侵食されませんでした。

研究課題

我が国の津波災害低減のための研究課題は色々あります。たとえば、がれきなどの漂流物による破壊力、避難ビルの安全性、堤防の効果、適切な避

難行動のための情報作成と伝達、津波に対する住民の理解などです。

従来の津波調査方法に加えて、今回は衛星画像、航空写真などが豊富に手に入ります。さまざまなデータをこれらの画像（地図）の上に整理し、今後の研究に利用するとともにデータ公開を行いたいと思います。

（東北大学大学院工学研究科

附属災害制御研究センター 今村文彦）



写真2 鉄道基礎の侵食

平成版「稲むらの火」

地震の予知・予測による災害軽減のためには、まだまだ基礎的研究開発が必要であるのに対し、津波は今ある技術や手段の適用ができれば確実に被害が減らせる種類の災害です。海底での大地震発生をいち早くとらえて、津波の情報を伝えたり、情報が無くても海の異変を察知していち早く逃げるなど、技術の応用と意識啓発によってかなりの程度被害を減らすことができます。

スマトラ島沖地震では、津波警報システムの必要性がクローズアップされましたが、それだけではなく、意識啓発の重要性を示した出来事もありました。海の異変に気付いていち早く津波が来ることを察知し、周囲の人々を避難させたことです。2005年1月11日付の米国地球物理学連合の情報誌「EOS」に次のような記事が掲載されていました。その要約をご紹介します。

2004年12月26日午前9時30分、英国の地震学者

Chris Chapman がスリランカ海岸にあるリゾートホテルで妻と朝食をとっていた。朝食後ふと見ると潮位がゆっくり数メートル上昇し、プールやロビーを浸し始めた。そのあと20分ほどかけて潮が引き、通常よりも7mも下がった。私たちは大きい「何か」がくると確信し、ホテルの従業員に海岸にいる人たちにすぐ避難するように拡声器で伝えてもらった。多くの人たちは異常な引き潮につられて海岸に出ていたのだ。午前10時10分、7mにもおよぶ大津波が押し寄せてきて、ホテルの1階のテーブルや家具などをすべて押し流した。しかし客も従業員もすべて上階に避難していて無事だった。

これ以外にも、タイの国際的観光地プーケットのマイカオビーチで英国の10歳の少女の話が報道されています。少女は海岸で潮が急速に引いていくのを見て、習ったばかりの津波の様子にそっくりだと思い、すぐ

に津波が来る前触れであることを母親に知らせました。母親は、いち早く周辺の人たちを海岸から避難させ、100人以上の命を救ったそうです。

これらの話は、まさに日本で知られている「稲むらの火」にそっくりです。よくご存じでない方のために「稲むらの火」を簡単に要約してみます。

「これはただごとではない」とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。村では豊年を祝う宵祭りの支度で心をとられさっきの地震にはいっこうに気が付かないようだった。海を見ると波が沖へ沖へと動いている。「大変だ、津波がやってくるに違いない」と五兵衛は思った。五兵衛は大きなたいまつを持ち、取り入れるばかりとなっていた稲むらに火をつけた。村中の人はそのを見て大騒ぎとなり、海辺から急いで上ってきた。そのとき「津波だ」と誰かが叫んだ。人々は荒れ狂って通る白い恐ろしい海を見た。村人はこの火によって救われたのだと気づいた。

この物語は、1854年の安政の南海地震の際に紀州有田での出来事をラフカディオ・ハーンがA Living Godとして英語の物語とし、それを中井常蔵が日本語で書き改めたもので、昭和12年から21年まで小学校の国語の教科書に掲載されていました（写真）。この物語は海外にも広まり、ハワイ島ヒロにある津波博物館でもビデオで放映しています。

今回の地震津波におけるタイ、スリランカの話や稲むらの火の共通点をまとめると次のようになるでしょう。

異常を察知する
その原因を推測・理解する

適切な行動を起こす

は、「おかしい」と思う感受性です。この感覚は人間よりも動物の方が感度が高らしく、タイなどでも動物がいち早く高台に避難して犠牲は少なかったそうです。ところが人間は好奇心の動物であるため、たとえ「おかしい」と思ってもすぐには避難行動につながりません。多くの人は好奇心につられて潮の引いた海岸に降りていき、取り残された魚などについて夢中になってしまうようです。そこに大きな津波が襲って多くの人が犠牲になっています。そこで大事になるのが原因を推測・理解する能力です。あらかじめ津波の知識があれば、目の前で起きた現象を津波に関係づけることは可能でしょう。推測することができない場合には津波の警報が役に立ちますが、理解できないと次の行動にはつながりません。最後には適切な行動を起こすことによって、自分や他人の命を救うことができます。しかし、ここで「たいしたことはない」とか「もしも自分の判断がまちがっていたら大変だ」などの心理が働き、行動に結びつかないことも多かったはずで

す。今回の津波災害に際して、多くの人を救ったのが日本人ではなく英国人であったのは何故でしょうか。津波災害をよく知っている日本人もいたはずですが、先の英国人のような話は聞いていません。これは、日本の教育のせいでに結びつかなかったのか、それともの行動を躊躇したのが原因だったのでしょうか。そもそもの感覚が鈍かったのでしょうか。日本人にとっては考えさせられることです。もっとも自分がその場にいたとしても、適切な行動ができたかどうか自信がないのですが。

（東京大学地震研究所 山岡耕春）

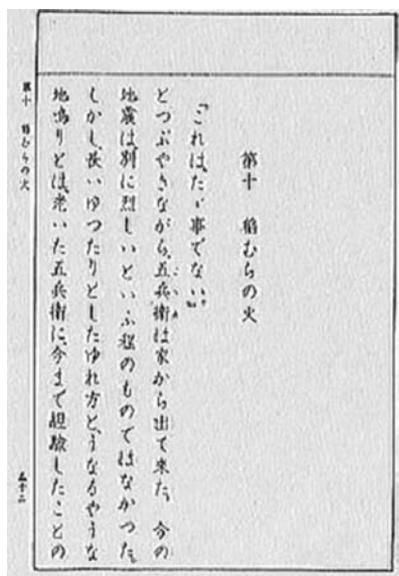


写真 昭和初期の小学校国語の教科書に掲載されていた「稲むらの火」(なゐふる29号より)

2004年スマトラ沖地震で発生した地球を周回する表面波

2004年暮に発生したスマトラ島沖大地震は、現在世界中に展開されているデジタル地震観測網が80年代以降に整備されて以来、初めてとなるマグニチュード9.0を超える巨大地震でした。今回の地震で発生した地震波は、世界中の地震観測網によって記録されています。ここでは、防災科学技術研究所によって日本列島全域に設置されている広帯域地震観測網（F-net）で観測された地震表面波の記録をご紹介します。

地震表面波の発生と伝わり方

地震波には、大きく分けて実体波と表面波の二種類があります。実体波には、地震の後最初に到達するP波（縦波）と、その後少し遅れてくるS波（横波）があります。さらに遅れて、大きな振幅を持つ表面波が到達します。表面波は、揺れ方によってレイリー波とラブ波の二つに分類されます。

表面波とはその名の通り、地球の表面に沿って伝わる波です。“表面”といっても実際には波の周期に応じて、深さ数十km～数百kmくらいまでが揺れています。周期が長い波ほど、地球の深いところまで揺れます。また表面波には、伝わる速さが周期に依存して変化する性質（分散性）もあります。周期の長い表面波は比較的減衰しにくく、大きな地震の際には、地球を何周も回る様子が観測されます。

地球を周回する表面波には特別な呼び方があります。図1にレイリー波の場合の例を示します。最初に、震源から観測点に向かう波をR1と呼び、この方向にさらに地球を一周するごとにR3、R5、...となります。震源からR1と逆向きに伝わる波はR2と呼ばれ、さらに一周するごとにR4、R6、...となります。

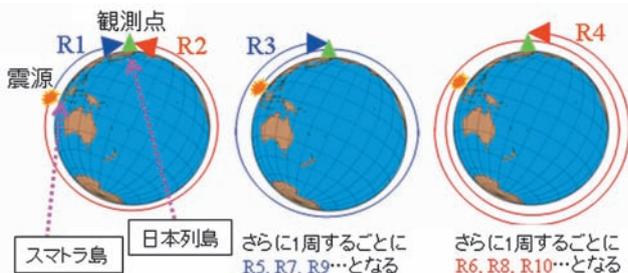


図1 地球を周回する表面波の様式

スマトラ島沖地震で発生した表面波

F-net観測網のうち71の観測点で記録された表面波（レイリー波）の記録を図2に示します。横軸は地震発生からの経過時間で、縦軸は震源からの距離です。ここでは長周期（周期200～300秒）の波形成分だけを取り出しています。この周期のレイリー波は、毎秒約3.6kmで伝わるので、およそ3時間（約11000秒）で地球を一周することになります。

今回の震源域は日本列島の南西側に位置します。ですから、表面波（R1）はまず沖縄に最初に到達し、日本列島を北東方向に通過し、北海道へと通り抜けま。一方、震源から正反対の方向へ出て行った波（R2）は、この逆の経路（北海道から沖縄へ）を通ります。

図2では地球を6周以上した波群が黒い筋となって見えています。図2下段の拡大図では、地球を何度も周回して長い距離を伝わるうちに、波同士の干渉や地球内部の不均質性によって、表面波の波群に乱れが生じている様子も見て取れます。

マグニチュード8クラスの地震なら、地球を3～4周する表面波が記録されることはさほど珍しくありませんが、今回のように地球を5周、6周と周回し続ける様子ははっきりと記録されるのは、まれなことです。さらに後続の時間帯までよく調べると、7・8周目に相当する波群まで見ることができます。この表面波の記録は、スマトラ島沖地震がいかに巨大なものであったかを伝えてくれます。

（北海道大学理学研究科 吉澤和範）

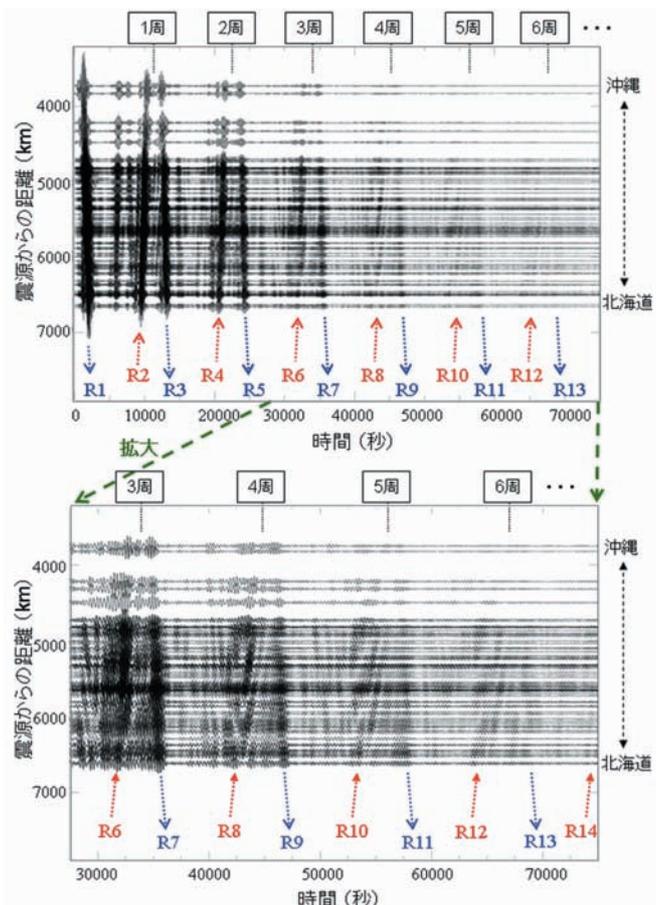


図2 日本列島の広帯域地震観測網（F-net）で捉えたスマトラ島沖地震の波形記録。

「消防団は命をかけていますから。」昨年9月5日の紀伊半島沖の地震が発生してから半月後に、たまたま訪れた紀伊半島のある町の消防団の団長さんの言葉です。実は、その前に消防署の幹部の方のご挨拶があり、9月5日の地震で津波警報が出た際に、消防団と一般住民の方の協力を得て、津波の情報収集がスムーズにいったということで、よく聞いてみると警報が出ているにもかかわらず、皆で港の周辺を見回ったということでした。びっくりして、挨拶のあと、それはまずいですよと幹部の方に諫言に行った時、隣にいた消防団の団長さんが言われたのが冒頭の言葉です。

思わず、「消防団が命をかけても津波は止まりませんから。」と言ってしまいました。津波の時は何を差し置いても高台に逃げるのが原則で、港の周辺をうろつくのはもってのほかです。こんな状況では、予想されているような東海地震や南海地震が来れば、多くの人々が津波で命を落とすことは必定と、暗澹たる気持ちになりました。そんな矢先、昨年12月のスマトラ島沖地震では、その心配が現実のものとなってしまいました。

そこで一つの言葉を思い出しました。それは「一人の百人力より百人の一人力」という言葉です。この言

葉、昨年8月7～8日に日本地震学会と日本火山学会の共催で神戸で行なった「地震火山子供サマースクール」で、子供達のグループの1つが考え出した地震防災のキャッチコピーです。

地震は言わずもがなの自然現象で、現実的な範囲でどんなに堤防を高くしても、絶対津波の侵入を防げるとは断言できないし、地震の強い揺れを抑え込むことも現状ではとても出来るものではありません。行政であれ、誰であれ、スーパーマンでない限り、いくら命をかけてもらっても、住民全てを安全にできる類の現象ではないのです。だからみんながそれぞれに自覚して一人力でいいから行動することが重要になります。中には一人力半位の人もいるので、その人たちが協力して老人や子供を助け一人力に引き上げる。そんな人たちが力を発揮しやすいように、行政は環境作りを工夫する。それが地震防災だと思います。「地震防災にヒーローは要らない」なんて言葉も聞いたことがあります。

本シリーズでは10回にわたり、みなさんが一人力を適切に発揮できるようにするためにはどうすればよいかを考えていきたいと思います。

(鹿島小堀研究室 武村雅之)



写真2 みんなの一人力で成功した地震火山子供サマースクール。本番もこんな協力ができればきっと大丈夫
(於：神戸2004年8月8日)

こどもサマースクールの「卒業生」、震災10年の神戸に結集 「私たちが学び、知ったことを分かち合おう」と宣言

阪神・淡路大震災10周年を記念して1月15日と16日に、神戸市の「人と防災未来センター」で開かれた「メモリアルコンファレンス・イン・神戸X」に、日本地震学会と日本火山学会が開催してきた地震・火山こどもサマースクールに参加した代表者が集まって、「私たちが学び、知ったことを分かち合おう」という神戸宣言を発表しました。

地震・火山こどもサマースクールは、1999年に静岡県函南町の丹那断層を舞台に第1回が開催されて以降、有珠山、伊豆大島、富士山、六甲山と地震や火山を身近に感じる場所で、主に地元の小中高生を対象に実施し、これまで291人が参加しています。

神戸に集まったのは、アンケート結果などを元に各回から1-2人ずつ選ばれた人で、北海道や伊豆大島、東京、静岡から招待され、昨年の「Mt.Rokkoのナゾ」に地元から参加した小中高生らを加えた11歳から23歳までの8人。「震災の教訓はどう生かされたのか、生かされていないのか？」をテーマにしたこのコンファレンスでは、「私たちが何を受け継いでいかなければならないか」という分科会を受け持つことになりました。

1日目は、同センターの見学などの後、それぞれが参加したサマースクールで何を学んだのかなどについて意見交換をし、夕方からは岩波ジュニア新書「神戸震災をこえてきた街ガイド」のフォーラムに参加。震災後の復興に取り組む人とまちを紹介した同書を事前資料として送っていたため、フォーラムでは鋭い質問がいくつもくり出され、著者の島田誠さんが「そこまで読んで頂ければ感激」とコメントするほど。宿泊先でも、同行した地震学会の普及行事委員のメンバーも混じって夜遅くまで意見交換が続きませんでした。

2日目は、地元からさらに3人が加わり、本番の分科会で発表する「神戸宣言」の取りまとめの議論を、自分たちでパソコンに打ち込みながら進めました。大半が初めて顔を合わせたのにも関わらず、11歳から23歳までの参加者が率直な議論を交わし、学会側のスタッフは意識の高さに目を見張りながら周りで見守るだけでした。

午前中の分科会では、サマースクールの活動を映像で紹介し、そこから学んだことや、被災地・神戸で感じたことなどを討論して、最後に神戸宣言を発表。午後からの総合討論では、居並ぶ防災専門家の前で分科会の経過と宣言を堂々と紹介しました。コーディネーターを務めた土岐憲三立命館大教授も「(みなさんの今後の活躍に)ぜひ期待している」とコメント、カンファレンス全体の提言にもそのまま宣言が盛り込まれました。

神戸宣言

2005年1月16日 人と防災未来センター
地震・火山こどもサマースクール参加者代表
『多くの手で生き返るまち、神戸』
身近な自然を知ろう～過去の災害から学ぼう～
自然の恵みに感謝して、災害が最小限になるような街と社会を創ろう
私たちが学び、知ったことを分かち合おう

2日間の参加者たちからは、今年8月19、20日の予定で九州の霧島で開催を計画中のサマースクールにスタッフとして参加したいとの申し出もあり、互いに連絡を取り合うことを約束して解散しました。

(日本地震学会普及行事委員会 中川和之)

広報紙「なみふる」購読申込のご案内

日本地震学会の広報紙「なみふる」は、隔月発行(年間6号)しております。「なみふる」の購読をご希望の方は、氏名、住所、電話番号を明記の上、年間購読料(日本地震学会会員:800円、非会員1200円、いずれも送料込)を郵便振替で振替口座00120-0-11918「日本地震学会」にお振り込みください(通信欄に「広報紙希望」とご記入ください)。なお、「なみふる」は日本地震学会ホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/ssj/>)でもご覧になれば、pdfファイル版を無料でダウンロードして印刷することもできます。



日本地震学会広報紙「なみふる」 第49号 2005年5月1日発行 定価150円(郵送料別)
発行者 (社)日本地震学会/東京都文京区本郷6-26-12 東京RSビル8F(〒113-0033)
電話 03-5803-9570 FAX 03-5803-9577(執務日:月~金)
編集者 広報委員会/
古村孝志(委員長)、田所敬一(編集長)、五十嵐俊博、桑原央治、小泉尚嗣、
末次大輔、武村雅之、中村浩二、西田 究、八木勇治、山口 勝
E-mail zisin-pr@ml.asahi-net.or.jp
印刷 創文印刷工業(株) 本紙に掲載された記事等の著作権は日本地震学会に帰属します。